

&lt;会員のひろば&gt;

## 主人公づくりと徹底民主主義

古村 義夫 (京都府/峰山町人権を守る会会長)

先日の新聞に「授業おもしろい」と答えないと減点と言う小さな見出しの記事が目に入った。茨城県のある中学校の数学のテストで「負の数」の学習後のテストで感想を問い、(ア)おもしろいと思った(イ)むずかしくてよくわからなかった(ウ)なんとも思わなかった、いずれかに意思表示するものであった。

彼は「負の数」の学習部分も加えて全問正解で丸はつけられていたが、採点は10点満点で7点であった。理由は(ウ)を選び出し、計算問題を解くとき、計算の途中でまきちんと書くようにしているか、の問いについても、(イ)時々そうしていると答えたからだそうである。

私は40年間小学校の教師をして来た者だが、常に「学校の主人公は子どもたちである」と思い仲間との合言葉としてきたものである。また、教職員組合運動にも参加し、学力テスト、勤務評定反対闘争、賃金闘争を始め、かなり多くの激しい運動を経験して来た。その度に労働者が主人公の社会作り、民主的職場作り、職場の民主化、組織の統一と団結を唱えてきた。今労働組合界は、運動しない、闘わない、組合費を納めるだけの組合、組合員の利益や権利を守らない組合となっている。憲法にうたわれている「国民主権」、組織員が「主人公」は、意識は低く形骸化してしまっている。

かつては現職にあった頃「学校の主人公は子どもたち」にするには如何にあるべきか、様々な実践を試みた。学校における学習の主体者「子どもたち」が、学習を自らの学習権行使の場としての学校、教師はその援助者である事を認識していくのが重要な事です。

退職して4年半になりますが、退職する2~3年前から京都では「学校の主人公は学校長である」との行政指導がなされるようになって来た。子ど

も達を学校の主人公として、民主的教育集団としての学校という組織が否定され、学校が学校長を主人公とし、学校組織の頂点に位し、組織内のすべてを支配管理する場となっている。

現職当時、子ども達が如何に主体的に学習するようになるかを研究実践した。学校という処へ子どもたちは何をしにやってくるのか、それは勉強である。従って何はともあれ毎日の授業が大切にされなければならない。毎日の授業で子ども達が「先生から教わった」のではなく「自分たちが勉強した」と実感するようにはならないものかと。

まず、学習計画を立て、週間授業時間表に沿って全教科の学習予定表を作り、全員に配布する。明日、明後日と、一週間の何曜日の何時間目の何教科は何を勉強するのが分かるようにしておく、子どもたちはそれによって予習学習を家庭でやってくる、私からの強制や割り当てや指示はしない、子どもの自主的主体的意志により予習する。

すべての教科はこなせないで、自分で選択し2教科ぐらい予習する者が多かった。教科の好き嫌い、得手不得手ははっきりしてき、予習に偏りが出てくるようになりなるべく平均的配慮をするように言ったこともある。

私は朝登校を始業前30分とし、子どもたちは登校してそのまま職員室に直行、私の机の上に予習して来たノートを置く、私はサッと目を通す、誰がどんな予習をして来ているのかをメモする。授業は予習して来た子どもの発表を中心にして進める。自分が予習して来た事がどんどん板書され、私が何人かの発表を整理し、不十分な処を補い、まとめて行く。競って発表です。自分の予習学習がみんなの勉強を進めていく、質問も出る、うかうかはしておられない。昨日苦勞して予習して来た勉強が、生きている事を実感し、興奮し、満足し、主体者感が沸き起こってくるようだった。

次の授業は予習して来ていない教科なので学ぶ側となる、しかし、友達の発表を聞きながらの学習は、教師の側から一方的に流れる講義式学習より興味もあり、関心も高く、学習意欲、集中も良く学習効果も高い、そして何よりも自分が主人公となって勉強した前の時間の授業感が引き続いていることがいい事だったと思った。父母には必要な参考書、字典、辞典等の購入について協力を得た。

ここで問題として出て来た事は、予習学習をしない子どもをどう指導するのかという事である。予習をしてこない者にも二つがあり、一つはいわゆる「怠け」でして来ないもの、二つには能力的に十分やり切れないものである。前者は意欲の問題なので、一度経験させ喜びを感じ取らせたり、励ましをすることで何とか切り抜けられた。後者については、好きな教科から取り掛かり、必要な参考書を求める事から、具体的な学習の方法や、援助もすると言う事で進めた。同一学級で2年間も続けると、見違えるように変わって来た。毎日プリントで宿題を準備し、翌日はその〇つけに追われ、やって来なかった子どもに罰を与える、そうしていても成果は上らず結果は勉強を嫌なものにしてしまう。

体育の授業でソフトボールの試合をすることがよくあったが、2チームの組分けの方法で、普通の場合体育が得意でソフトボールの上手な子どものリードで組分けがなされるが、私はソフトボールをやると、守ればエラー、打てば三振、ルールさえ十分知らない、体育不得手な子どもが組分けをするようにしていた。

得意とする子どもたちの組分けは、一人でも少しでも巧い者を我がチームにとケンケンガクガクである、分けた結果も不公平だと不満が残ったまま、その上試合に負けようものなら個人の責任追及で泣き出してしまふ子どもさえ出る始末です。ところが後者の組分けを見ていると、至って公平で欲得無しで分けられ、スムーズで問題も少なかったと思う。

ここで大切なのは、不得手でソフトボールの下手な仲間に、組分けの権限を委譲できる学級集団

であるのかどうかという問題である。集団が常に底辺にある人のことを大切に、底辺上辺の無い組織作りに努めなければならない。

生活指導の分野で、生活指導上の問題が出て来て取り組みを進める場合、先ずその問題の全貌を学級全員に、事実にもとづく共通の現状認識をし、次に個人個人にその問題に対する自分の考え意見を書かせ、それを基にして話し合いをする。

事实现状認識が異なると、当然意見考えも違ったものが出てき、基礎が違うのでいくら討議しても方向結論は一致しない。また初めからフリー討議とすると、発言のできる者から意見を述べる事となり、気後れのする人、おとなしい人、考えのまとまらない人の発言が不十分となる事が多い、更に他人の発言を耳にすることにより自分の考えがクルクル変わってしまう者も出てくる。

たえず自分の意見をもつように心掛けなければ自己は確立しない。共通認識と、全員が意思表示出来るような方策を考える事が大切である。

こうして常に、個の確立を念頭に置くことが必要であるが、個の確立は個の所属する集団と深くかかわったものである。

各個人が主人公としての自覚・素質が備わって行くことは、所属集団組織が民主的集団として成長して行くこと表裏の関係である。

主人公づくりは、民主的集団作りであるとも言える、各個人が主権者として尊重されていない組織は民主的集団とは言えず、民主的組織でないと個人は尊重されない。学校教育の場としての基礎組織「学級集団」の在り方は、最も重要視されなければならないもので、すべてはここにかかっている。

大人の集団と子どもの集団、生活のかかった労働集団と直接生活のかからない学習集団等、事業団の事業所職場集団の組織運営と、学校での学習子ども集団とは根本的な違いはあろうが、団づくり人づくりに始まって、団づくり人づくりに終わると、主人公意識の確立と徹底民主主義を追及する事業団活動を見聞していて、私の不十分なささやかな経験から、こんなことを思い起こしている。